

THE A MUSEUM

Vol.4-3 第12号 2010. 2. 10

Saitama Prefectural Museum of History and Folklore



特別展
「雑兵物語の世界」

会期
平成22年
3月20日(土)～5月9日(日)
休館日 3月29日・4月5日・12日・19日・26日
観覧時間 9時から16時30分まで(観覧受付は16時まで)
観覧料 一般600円、高校・大学生300円
中学生以下と65歳以上の方、障害者手帳をお持ちの方は無料

「雑兵」は、足軽など最下級の兵の総称で、これまで合戦の表舞台に立ちながら名を残すことなく、歴史を蔭で支えてきました。この「雑兵」に焦点をあてた展覧会を、今春、当館で開催いたします。

これまで各地の博物館などでは、戦国時代から江戸時代の武士の歴史は、大名や旗本、大将クラスなど上級武士を中心に語られ、展示されてきました。

しかし、こうした上級武士は、合戦では後方にあり、藩内でも上層部のごく一部にすぎません。上級武士たちは、領国を支配し、政をつかさどり歴史を動かしてきましたが、実戦や生産を支えていたのは、下級武士や足軽であり農民たちでした。このような農民は、領主の命令によって徴発されて、下級武士や足軽などとともに雑兵として軍団に組み入れられ、合戦に参加しました。

展覧会では、全国有数の伊澤コレクションを中心に、彼らが身につけた足軽胴や陣笠はもとより、火縄銃や長柄などの関係資料を元に、雑兵の実態に迫ります。特に足軽胴や陣笠は、敵味方を判別するために、合印と呼ばれる主家の家紋や印をつけることができました。この合印は、それぞれ各家中で工夫を凝らし、現代に通じるデザイン性が感じられます。

また展示では、彼らの生きた時代に戦場での武功や存在を目立たせるため、様々な意匠を凝らした変わり兜を紹介します。変わり兜は、神仏、動物、植物、道具などの奇抜な形象を表しています。その意匠は、技術的に優れているばかりでなく、いくさ人の美意識には目を見張ります。

これまであまり省みられなかった「雑兵」たちの姿を通して、新たな歴史像を紹介します。

特別展「雑兵物語の世界」

プロローグ 雑兵のイメージ

「雑兵」と言うと、一般にイメージされるのは戦国時代の足軽でしょう。しかし、雑兵は、足軽ばかりではなく地侍、動員された百姓、徴発された陣夫などを含む身分の低い者たちの総称でもあります。江戸時代には、幕府の同心なども含まれ、戦闘補助員、非戦闘員など役割も多岐にわたっています。

主な展示資料：足軽胴(伊澤コレクション)・陣笠(当館蔵)



足軽胴(伊澤コレクション)

第1章 「雑兵物語」にみる足軽の姿

「雑兵物語」は、足軽などの戦場における経験談や役割を、彼らの口で語らせた書物です。作者は不詳ですが、老中で川越藩主であった松平信綱の五男・信興のぶおきが関係しているといわれ、明暦3年(1657)～天和3年(1683)の間に成立したとされています。

①「雑兵物語」の成立と展開

この「雑兵物語」は、江戸時代の泰平の世になって、忘れつつある合戦の心得を知るための武士たちの教科書ともいえ、彼らの危機意識から写本が多く作成されました。やがて幕末の外国船渡来による攘夷運動の中で再び脚光を浴びて出版されましたが、西洋式の戦争ではもはや時代遅れの内容となっていました。



「雑兵物語」(東京国立博物館蔵)

②「雑兵物語」と大河内松平家

成立に、松平信興のぶおきが関わったとされる理由のひとつに、「陪従私記」という側近の記録があります。この記録には、信興が戦史や故実に関心があり、「雑兵物語」を所持していたことが記されています。家中以外には秘蔵され、他家への貸出も憚られるほどでした。その後、八代将軍徳川吉宗よしむねの命により献上されることとなり、この前後には写本が作られて、流布するようになったようです。

主な展示資料：「雑兵物語」(東京国立博物館・國學院大学図書館蔵)『雑兵物語』(当館蔵)



菊三蝶紋足軽胴と陣笠(伊澤コレクション)

第2章 雑兵の登場

～絵巻物や文献にみる足軽～

雑兵の起源は、史料では10世紀半ばの『将門記』の「伴類ぼんるい」に見ることが出来ます。強制的に集められた徒歩の戦闘補助員で、主人に対する忠誠心はあまりなかったといわれます。また『保元物語』や『平家物語』などにも「足軽」、「歩立の兵」とあり、絵巻物にも従者として軽易な武装で描かれており、中世初期から活動を見ることが出来ます。

主な展示資料：『将門記』・「平治物語絵巻」(摸本)・「蒙古襲来絵詞」(摸本)(いずれも当館蔵)



「平治物語絵巻」(摸本)(当館蔵)

特別展「雑兵物語の世界」

第3章 雑兵の装い

～足軽胴と陣笠・装備～

雑兵は、最前線を駆け回って戦うため身軽に動けるように軽武装でした。武士が兜や鎧など重装備であるのに対して、陣笠や足軽胴といった軽易な防具です。しかし、これらは自前ではなく主家からの御貸具足であり、鉄炮や槍等の武器も同様でした。そのため陣笠や足軽胴には、合印という敵味方を判別する家紋や図様が描かれています。



火縄銃付属資料のうち鉄砲筒（国立歴史民俗博物館蔵）

第4章 戦いの美意識

～奇想のファッション・変わり兜～

足軽胴に付けられた合印は、家紋のみならず様々な図様が描かれ、当時の人の美意識が感じられます。いくさ人として戦場に立つことは、晴れ舞台であり、また己の活躍を誇示する必要がありました。そのため最も目立つ兜に意匠を凝らし、ある種の「男伊達」などという美意識も感じられます。特に変わり兜は、奇抜なアイデアで形作られたものもあり、実用的な中にも泰平の世の伊達や遊び心が感じられます。また、上杉景勝所用と伝えられる甲冑が、特別出品されます。

主な展示資料：銀箔押兎耳形兜（国立歴史民俗博物館）、象形張懸兜（当館蔵）、鮑形脇立付鉄地打出和製南蛮兜（個人蔵）



変わり兜（個人蔵）

第5章 雑兵の終焉

雑兵たちは、江戸時代になると足軽や同心として武士の格となりましたが、相変わらず地位は低く、明治維新後は、兵員か巡査となりました。しかし、下士官以上と警部以上はもとの武士階級の士族に限られ、以前と変わらない身分でした。

コラム1 出土品にみる雑兵の姿

雑兵が守った県内各地の戦国の諸城址からは、彼らの戦いの様子や生活の痕跡が発掘されています。

主な展示資料：騎西城跡出土品（騎西町教育委員会蔵）

コラム2 『のぼうの城』

天正18年（1590）の石田三成の忍城水攻めを描いた和田竜氏の歴史小説関連資料を紹介します。

第139回直木賞候補作。2011年映画化予定。

主な展示資料：『のぼうの城』シナリオ作成資料



『のぼうの城』表紙
（和田 竜 著
オノ ナツメ装画
／小学館）

※会期中、一部展示替えを予定しています。

関連事業

①記念講演会「『のぼうの城』完成まで」

日時 4月24日（土）午後1時30分～3時

講師 和田 竜氏（作家）

※往復はがきに住所・氏名・電話番号を明記して特別展示担当宛、4月1日（木）締切150名（ただし、定員を超えた場合は抽選）

②ギャラリートーク「私と足軽胴」

日時 3月20日（土）・4月11日（日）午後2時～

講師 伊澤 昭二氏（甲冑研究家）

③足軽胴を着てみよう（足軽胴と陣笠着用体験）

日時 5月5日（水）①午前10時～11時30分

②午後1時～3時

会場 屋外ステージ（天候不良の場合は、エントランスロビー）（見学無料）

④展示解説

3月27日・4月3日・17日・5月1日の各土曜日の午後2時～ 《特別展示担当 杉山正司》

博物館 リフレッシュその1 近現代の新展示オープン

常設展示室第9室では、明治維新から現代に至るまでの埼玉県の歴史と文化を、テーマに沿って展示しています。2月16日(火)のリフレッシュオープンでは、埼玉県の設置に始まる近現代の埼玉の歴史と文化を10のテーマに分けて展示しました。

展示テーマは、埼玉県が、大きな社会変革のなかで、県民の知恵と労苦によってたゆみなく発展してきた姿を、時系列で把握できるように設定しました。また、昭和30年代の庶民の暮らしや郷土の地場産業を紹介するとともに、先人に学ぶコーナーとして埼玉の人物を充実させて展示しました。

展示替えにあたっては、鑑賞者の視点に立って作業を進め、展示テーマを象徴する社会変化や事件、先人の業績などは、図や表にまとめて掲示することにより、展示テーマの全体像が視覚で理解できるように工夫したり、社会事象や事件などについては、これを象徴する現場の写真を掲示し、展示テーマの臨場感を演出したり、読む展示になりがちな展示をできる限り立体物や絵画・絵図面などの実物資料を展示することで、見る展示になるよう努めました。なお、展示構成は次のとおりです。

1 埼玉県の誕生

埼玉県の誕生と県会の開設、公選議員による県民の県政への参加などを紹介しています。

2 自由民権運動と秩父事件

県内における民権結社の結成とその活動、不況に苦しむ農民の抵抗運動として秩父事件を紹介しています。

3 産業の近代化

蚕糸業をはじめとする地場産業の発展と近代工場の進出、これらの産業発展に尽力した人々を紹介しています。

4 日清・日露戦争と埼玉県

日清・日露戦争と県民とのかかわり、戦後の混乱と農村の荒廃、地方社会の再建を目指す地方改良運動などを紹介しています。

5 大正デモクラシーと県民生活

自由主義思想に基づく大衆文化、労働争議や米騒動、関東大震災などによる苦しい県民生活の様子などを紹介しています。



ラジオ（四球式交流受信機）

6 昭和恐慌と戦争への道

満州開拓や二・二六事件に動員された県民の動向、軍国主義化する行政と日中戦争への歩みを紹介しています。

7 軍需工場と空襲被害

首都防衛のための軍用施設の進出と民需工場の軍需工場化、勤労働員や空襲被害の様子を紹介しています。

8 戦後の復興

食料難や物資不足などによる戦後の混乱、主権在民に基づく戦後民主主義の歩みや地場産業の復興を紹介しています。

9 高度経済成長と埼玉県

産業経済の高度成長に伴う県勢の発展、その象徴として東京オリンピックや埼玉国体・さいたま博覧会などを紹介しています。



さいたま博覧会のマスコット「サイターマン」
(熊谷市立熊谷図書館蔵)

10 発展する埼玉県

平成の大合併をはじめ、埼玉県が実施する大型プロジェクトやゆとりとチャンスにあふれた都市づくりなどを紹介しています。

11 埼玉の地場産業

川口鋳物・狭山茶など、現代に息づく埼玉の代表的な地場産業を順次紹介していきます。

12 埼玉の人物

おぎの ぎんこ とおやまげんいち
荻野吟子・遠山元一など、郷土の発展に尽くした埼玉の偉人を順次紹介していきます。

(常設展示担当 沼野 勉)

博物館 リフレッシュその2 民俗の新展示オープン

常設展示第10室（民俗展示室）では2年おきにテーマを新たにして展示替えを行ってきました。平成18・19年度の「技に生きる～生産生業と諸職～」、20・21年度の「一年を生きる～祭りと行事～」に続き、今回は「一生を生きる～人生儀礼～」をテーマとして、埼玉の民俗の一端を紹介することにしました。

人が生まれ、成人し、やがて死を迎え先祖としてまつられるまでの人生は、さまざまな儀礼に支えられたものでした。出産も結婚式も葬式もすべてが自宅で行われたころ、地域社会（隣近所）との関わりは何よりも大事にされていました。なかには科学的根拠のない迷信じみたものもありますが、そこには生きるための切実さを垣間見ることができます。

展示は次の4つのテーマに分けてみました。①小さな命とその成長、②幾久しき祝いの儀、③年を重ねて、④死と魂のゆくえです。①では安産祈願の信仰に始まる出産の儀礼を中心にして、赤ん坊から子供、やがて若者へと成長をしてゆくまでを取上げています。②は結婚にまつわる習俗。特に花嫁が最初に嫁ぎ先の家に入るときには、杖をついたり、たいまつたいまつの火をまたいだり、玄関で姑と杯を交わしたり等々、今では見ることのできない独特の儀礼がありました。③では厄年やくどしと年祝いとしいわを扱います。年祝いとして県内で広く行われたのは米寿の祝いで、寿命が短かった時代にはその長寿にあやかろうとしたものです。④では伝統的



たらいで産湯をつかう（小川町 個人提供）

な葬儀について紹介しています。死に対する恐れやけがれは、今よりもずっと強いものがあり、死者の靈魂をなだめようとしてさまざまな儀礼が行われました。肉体と靈魂は別という考え方から、死体と埋葬する「埋め墓うめぼか」と、石塔を建てて魂をまつる「詣り墓まいぼか」を分けるところが県内広く分布していました。

江戸時代の子供の産毛とへその緒、お宮参りやおびと帯解き（七五三）に着た衣装、結納品や花嫁衣装、座棺やそれを運ぶ棺台など、興味をそそられる資料を県内各地から収集してみました。明治から昭和にかけて撮影された古写真も多数紹介しています。たらいでの産湯（写真左下）、嫁入り行列、土葬の様子など、貴重な写真が盛りだくさんです。また、室内に4つ設けた「埼玉の民俗ミニシアター」では昭和50年代に県が製作した『秩父の通過儀礼』という映像記録（抜粋）をはじめとする動画もお楽しみいただけます。

（常設展示担当 大久根 茂）



明治35年の婚礼図（小川町 個人蔵）

「道中記」とはその名の通り、旅行の道中の、宿場や里数、名所、旧跡、街道風景、諸経費などを記した日記文・紀行文のことです。

江戸時代後期になると、庶民の暮らしにも多少の余裕が生まれ、信仰面にたいしても関心を持つようになりました。そこで、自らが靈験あらたかな寺社に出向き参拝する、といったことを目的とした寺社参りの旅に出る者が多くなりました。しかし、初めて行く土地には、どのようなルートで向かうのか、休憩・宿泊できる場所はどこにあるのか、各地の名物や文化はどのようなものか、といった疑問がたくさんあります。そこで役に立ったのが、「道中記」でした。旅の道中の様子が細かく記されている「道中記」は、初めての土地に足を踏み入れる人々にとって自分の疑問に答えてくれる、実用的なガイドブックだったのです。

「道中記」と聞いて、すぐに思い浮かぶのは、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』ではないでしょうか。「弥次喜多」で知られる、主人公・弥次郎兵衛と喜多八が、江戸から出発して東海道を旅してまわり、途中途中で様々な滑稽な事件を起していく様子を描いています。あまりにも人気が出たため、『東海道中膝栗毛』と『続膝栗毛』あわせて、20編・21年間の超長期連載であり、当時の人気のほどが伺えます。これは道中記に「笑い」の要素を詰め込んだ、江戸時代後期を代表する文学作品であり、道中記としての性格よりも、滑稽談としての性格が強いものです。



中山道道中記

しかし、普段ガイドブックとして持ち歩いていたものは、このような長編で冊数の多いものばかりではなく、折りたたんで携帯でき、かさばらず、荷物にならないものでした。

ところで、江戸時代には東海道の他、4つの陸上交通路が整備されました。それは、五街道と呼ばれ、東海道、中山道、甲州道、奥州道、日光街道を指します。その中で、東海道と並んで江戸と京都を結ぶ大街道である中山道は、慶長7年(1602)から整備が始められ、人々や物資、文化を運ぶ重要な交通路として埼玉の人々の暮らしに結びついてきました。中山道を旅する際に使用した道中記の1つとして「中山道道中記」があります(左下写真)。『東海道中膝栗毛』のように挿絵や滑稽談が描かれているようなものではなく、旅行のガイドブックとして持ち歩けるよう、宿場名と里数、名所など必要なことのみが記されている12cm×8.5cmほどのコンパクトなものです。

埼玉県内を通る中山道には、本庄宿、深谷宿、熊谷宿、鴻巣宿、桶川宿、上尾宿、大宮宿、浦和宿、蕨宿の9つの宿場がありました。

その中の1つ、大宮宿の成立は、文禄年間から慶長7年前後と考えられています。現在の道筋とは異なり、大宮公園内に建つ氷川神社の参道の一部が中山道の道筋だったようです。寛永5年(1628)に今現在の道筋に付け替えられとされています。



木曾街道大宮宿富士遠景 (英泉画)

これは、大宮宿付近の風景を描いた作品です。桜が咲く早春ののどかな風景。左手には富士山、右手には大宮宿を後にし、上方(京)へと向かう旅人が描かれています。私もガイドブックを手に、中山道を旅してみたいくなる今日この頃です。

(資料調査担当 藤崎温美)

三月三日の雛祭は雛人形や雛道具を飾り、それに桃の花や白酒を供えて、女兒の無事な成長を願う年中行事です。雛祭は「桃の節供」ともいい、また五節供の一つ「上巳の節供」に当たります。上巳とは三月最初の巳の日のことで、古代中国ではこの日に、川の水で身を清める祓の風習がありました。この風習が平安時代に日本に伝わり、やがて草や藁などを人の形に作った「人形」に穢れや災いを移し、川や海に流す風習と融合しました。また、貴族の間では「天児と這子」と呼ばれる小児の形をしたものが、幼児にふりかかる災いを祓うものとして使われていました。これが後の「立雛」の起源と考えられています。

一方で「ひいな遊び」と呼ばれる小さな人形や道具で遊ぶことが、上流階級の子女の間で行われていました。こうした「人形」や「天児、這子」などの祓の信仰と、「ひいな遊び」が長い間に結びついて、「雛祭」に発展したといわれています。

そして、江戸時代に年中行事として「雛祭」が定着すると、立ち姿の「立雛」から次第に座った形の「座雛」が作られるようになりました。三人官女や五人囃子なども加わって、三段、五段と高くなり、幕末頃には七段の段飾りへと形を変えてきました。近年では住宅事情や収納を優先させて、三段飾りが主流のようです。

ちなみに埼玉県は、全国一の生産高を誇る雛人形の産地です。さいたま市岩槻区、越谷市、鴻巣



切出しで目、鼻や口を削って整える

市、所沢市の四市で生産が行われ、いずれも埼玉県の伝統的手工芸品に指定されています。

雛人形は頭、手足、胴、小道具で構成され、それぞれ専門の職人による分業で作られます。中でも顔の部分を作る頭の製作は、人形のよしあしに影響する重要な仕事です。頭の種類には技法や材料の違いによって、石膏頭や桐塑頭などがあります。

ここでは、伝統的な材料と技法によって作られる桐塑頭の技を紹介します。

伝統的な材料とは、桐粉と正麩糊です。桐粉は桐材を製材した時に出るおが屑のことで、これに正麩糊を混ぜて練ったものを、型に詰めて生地を抜きます。この時、正麩糊の量が多すぎると乾いてから、ひび割れが生じるため材料の配合には、長年の職人の経験と勘が要求されます。次にガラス玉の目を入れ、貝の粉を膠で溶いた胡粉を目や鼻、口に置いて、顔に微妙な高低をつけていきます。さらに胡粉の濃度を調整しながら、何回も刷毛で丁寧に塗り重ねます。塗り乾燥を繰り返した後は、水拭きをします。美しい顔を作るための重要な工程です。そして目や鼻などを削り出し、職人は息を凝らして面相を描き込みます。描き方ひとつで顔の表情が決まるため、最も緊張する作業です。最後に髪を結び上げて完成です。このように多くの工程を経て卓越した職人の手から、雛人形の頭が一つひとつ生み出されるのです。

(学習支援担当 川上由美子)

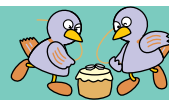


桐粉と正麩糊を練り込んだ桐塑を型に詰める

THE A MUSEUM



歴史と民俗の博物館イベント情報（2月～5月）



埼玉県の
マスコット
コバトン

- 特別展「雑兵物語の世界」を、3月20日(土)～5月9日(日)まで開催いたします。
- 常設展示室 第9室近現代展示室・第10室民俗展示室リフレッシュオープンしました。

◆ 2月

- 16日(火) 記念映画会「おくりびと」
- 16日(火)・17日(水) 特別体験事業「十二単の着装」
- 18日(木) 特別体験「藍の型染め手拭作り」
- 19日(金) 博物館資料特別鑑賞会(考古資料)
- 20日(土) ミュージアムトーク「昔の旅(伊勢参り)」
博物館裏方探検隊
- 20日(土)・21日(日) 「親子で挑戦!七段飾り」
「お雛さまとハイッ、チーズ」
- 21日(日) 民俗工芸実演「根付」
- 23日(火) 記念映画会「キューポラのある街」
- 27日(土)・28日(日) 特別体験事業「十二単の着装」
「親子で挑戦!七段飾り」
「お雛さまとハイッ、チーズ」
- 27日(土) 博物館裏方探検隊
- 28日(日) ミュージアムトーク「生と死の民俗」

- 21日(日) ミュージアムトーク
「縄文土器のうつりかわり」
- 25日(木)・26日(金) 特別体験事業「ペーゴマ作り」
- 27日(土) 特別展解説・博物館裏方探検隊

◆ 4月

- 3日(土) 特別展解説・博物館裏方探検隊
- 10日(土) ミュージアムトーク・博物館裏方探検隊
- 11日(日) 特展ギャラリートーク・ミュージアムトーク
- 17日(土) 特別展解説・博物館裏方探検隊
- 18日(日) 特別体験事業「十二単の着装」
- 22日(木) 特別体験「木目込み人形作り」
- 24日(土) 特別展記念講演会・博物館裏方探検隊
- 29日(木・祝) 特別体験「時代衣装の着装」
「お雛子体験教室」

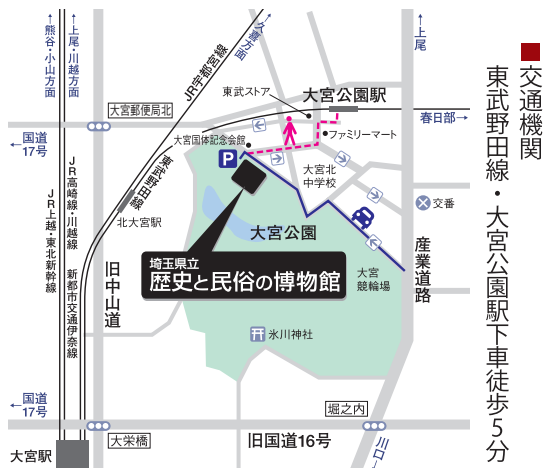
◆ 3月

- 5日(金) 特別体験「木目込み人形作り」
- 6日(土) 博物館裏方探検隊
- 7日(日) 特別体験事業「時代衣装の着装」
ワークショップ「五人囃子と語る」
- 13日(土) 特別体験事業「お雛子体験教室」
博物館裏方探検隊
- 14日(日) 歴史民俗講座
- 20日(土) **特別展「雑兵物語の世界」オープン**
ミュージアムトーク
「江戸の文人と考古資料」
博物館裏方探検隊

◆ 5月

- 1日(土) 特別展解説・博物館裏方探検隊
- 3日(月・祝) 博物館子どもまつり
博物館裏方探検隊
- 4日(火・祝) 博物館子どもまつり
博物館裏方探検隊
- 5日(水・祝) 一日子ども館長
博物館子どもまつり・博物館裏方探検隊
- 8日(土) ミュージアムトーク・博物館裏方探検隊
- 9日(日) ミュージアムトーク
- 15日(土) 博物館裏方探検隊
- 22日(土) 博物館裏方探検隊
- 29日(土) 博物館裏方探検隊

新収蔵品展 6月22日(水)～8月29日(日) 企画展「ヒーロー参上」7月17日(土)～8月31日(火)



交通機関

東武野田線・大宮公園駅下車徒歩5分

埼玉県立 歴史と民俗の博物館 (編集発行)

〒330-0803 さいたま市大宮区高鼻町4丁目219番地
TEL. 048-641-0890 (管理)
048-645-8171 (学芸)
FAX. 048-640-1964
<http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/>



埼玉県立歴史と民俗の博物館だより
Vol.4-3 (通巻) 第12号
2010年2月10日発行